語り下ろし市民活動㊽

アート、それは生きる実感の共有③

アート・サポートセンター神戸代表

撮影：杉浦 健
取材場所：ギャラリー島田
（神戸市中央区）

『①魂から魂へとつながっていく「新しい灯火」であるこの基金は多くの方に支えられ、助成された約80件の事業の先には多くのアーティストやその活動に接した人たちの「火の姿」があるのです…』。

島田さんたちが創設した市民ファンド、亀井純子基金。それは18年の光陰を駆け抜け、多くのアーティストたちに支援の花束を配りながら、昨秋、神戸文化支援基金へとバトンを手渡した。

市民が支える新しい寄付文化は、一回り大きなかたちをなして神戸から全国へ発信されつつある。

（聞き手・執筆　編集委員　村岡 正司）

■ブログで拝見しましたが、「亀井純子基金」「神戸文化支援基金」の審査、おつかれさまでした。

いやあ、きわめて厳しい審査になりましたよ。②メルマガにも書いたけど、閉廊後のギャラリーを会場に、晩の6時半から10時半まで、侃々諤々（かんかんがくがく）の4時間やったからねえ。ちょうどあなた達が座っているこの位置に、理事は7人全員、それに信託受託者の銀行から2人がテーブルを囲んでて。去年立ち上げたばかりの神戸文化支援基金との、初の合同審査です。

助成枠を倍増させた代わりに、応募件数も昨年の3倍、24件にのぼりました。要は基金の趣旨にかなう内容であるか。審査基準の透明性、公平性がなされているか。議論の大半はこれらに尽きるんやけどね。今後の課題もいろいろ見えてきて、審査方法や提出書類の見直しなどにも言及しました。ずっしりとした疲れが残りましたが、みんな精魂傾けて真剣にやった証拠です。

■「亀井純子基金」が発展して「神戸文化支援基金」が生まれたと考えていいのですか？

もともとは、こんなややこしい2つの基金をつくるつもりはなくてね。

島田さんのメルマガより

Gallery SHIMADA & A rt Support Center KOBE INFO 【４３８号】
2009年10月
うれしいお知らせです
目次　蝙蝠日記　　財団設立
展覧会案内　　展示もアートです
幻の「VOX ヒコーキ堂」再現！！　21日（水）
◆◇今日の言葉◆◇食べるとという行為をもっと大切に
食べるために働いているんだからね
藤竜也　　しあわせ食堂から
詳細は末尾
１７９２名の方にお送りしています。
◇◇◇

亀井純子基金は1992年にスタートしてるんやけど、ここ数年の間に、新しい形でのファンドレイジングの必要性を感じるようになってきたんです。純子さんのご主人の亀井健さんが理事長でご存命のころはね、純子さんの知り合いだとか、私の知り合いだとかに呼びかけて、毎年1万円の寄付をしよう、という応援団を組織してね。そのおかげで1年に百万円くらいの資金が集まってきてたんです。でも応援団もしだいに高齢化してきて、退団したいという人もだんだんと増えてきた。で、一方で、将来たとえば3千万、5千万というように、まとまった遺産を使ってほしいという人が現れたとしましょう。その場合、自分の寄付が、まったく面識のない「亀井純子」という名前の基金に入るということに対して、心理的な抵抗感を覚えるかもしれない。だから、基金名称を発展的に変えようということから構想されたのが、「神戸文化支援基金」やったんですよ。将来的な名称変更については、純子さんの遺産を託された健さんも了解されてましたから。

ほんで、亀井健さんも亡くなってしまわれた07年、基金のほうは15周年を迎えてたんですが、私が理事長を引き継ぎ、新体制を発足させたんですね。それから監督官庁の兵庫県と打ち合せ、さらに、亀井純子基金は公益信託③なので、管理をしてもらってる銀行とも相談したんだけども、名称変更はだめだというんです。それじゃあどうしよう、と考えていたとき、新公益法人④制度に変わった。で、それに則って認定NPO法人を目指すか、公益財団法人を目指すか、どちらにするかを専門家にいろいろ研究してもらった結果、一般財団法人は比較的簡単につくれるので、まずこの形態を選び、将来的には公益財団法人をめざそう、という道筋を描いたわけやね。それで昨年の10月8日に、「一般財団法人神戸文化支援基金」を設立したんです。基本財産は1千300万円、そのうち半分は、呼びかけに応じた多くの⑤一般市民からの寄付です。亀井純子基金は、将来的にそこへ吸収されることになるでしょう。

■いわゆる〝無名の一市民〟の名を冠した公益信託は、珍しいといえます。

まあ全国でも珍しいちっぽけな草の根基金でありながら、着実に資金を集め、活動を維持しているケースは稀やそうです。文化助成の公益信託というのも前例がないらしいしね。純子さんの遺産として当初もらったもともとの基金1千万円は、今も手つかずのまま残ってる。ということは、毎年百万円ずつくらいの助成をしてきた分は、その後の新しい寄付の集積でまかなわれているわけですね。現在、2つの基金合算で、2千500万くらいの基本財産があります。そういえば15周年記念行事のときのあいさつで、今田忠⑥さんが「奇跡や。現代の奇跡や…」とおっしゃってましたね（笑）。いずれ消滅するだろうと言われながら、今年で18周年を迎えます。

アメリカでは「Your Name Fund」と呼ばれ、盛んなしくみなんですけどね。市民の手でアートを支えるという、こんなやり方は、額は小さいけど意味のあるもんやと思うんです。ひとつの企業さんがポーンと出してくれるのも、確かにありがたいけれどね。さらにお金だけやなしに、そんな草の根運動を支えてる市民サポーター、一人ひとりの存在が、大変意義深いことやと思う。私たちの基金が、日本に新しい寄付の文化を根付かせるための旗じるしになり、希望の灯りになればいいなと考えています。

2千169名の読者に発信されている。登録申し込みはギャラリー島田のホームページから。http://www.gallery-shimada.com/。

③公益信託
個人や法人などの委託者から「公益（不特定多数の人々の利益）」のために資金の提供（信託）を受けた信託銀行などの受託者が、委託者の趣旨に沿った社会公益のため、その資金を管理・運用し、助成事業を行う制度。主務官庁による引受けの許可が必要とされる。

④新公益法人制度
08年12月から始まった抜本的改革で、従来の社団法人や財団法人の制度的位置づけが変更。13年11月末までを期限として、一般法人（一般社団法人か一般財団法人）、新・公益法人（公益社団法人か公益財団法人）、解散のいずれかを選択しなければならなくなった。

⑤多くの一般市民からの寄付
基本財産1千300万円のあとの半分は、島田誠さん自身による寄付。

⑥今田忠さん
（1937・）大阪市出身。元阪神・淡路コミュニティ基金代表。元NPO法人しみん基金

■島田さんは、亀井純子さんの生前から、こういう市民ファンドの構想を練られていたんですか。

純子さんは、そのころ三宮の貿易セ[7]ンタービルにあったオランダ領事館で働いておられて、日本とオランダの文化交流を一生懸命やってた人だったんです。オランダの画家、とくに現代アーティストの展覧会を海文堂ギャラリーで開いてくれないか、という照会があって、88年ごろからお付き合いが始まったんです。でも友だちであったとか、とくに個人的に親しいという感じでもなかったんですよ。だからもちろん、こういうファンドをつくりたいとかの話を聞いたことも、相談を受けたこともありません。

でもそんな縁で、私もオランダ領事館に出入りするようになって。そのころの領事さんがアート好きの人でね。気が合ったというか。ちょうどギャラリーがリニューアルしたとき、オランダの画家、ファステンハウトさんの個展を開いたんですが、オープニングの日の華やいだ雰囲気を壊さないようにと、私にそっと「もうすぐ入院します」と告げられたんです。私と知り合ったころには、もうすでに自分の病気について、余命についてわかっておられたんだ、ということを後で知りました。そして、その翌年に40歳の若さでお亡くなりになった。だから、ご一緒したのは20時間にも満たないような気がしますね。健さんとはあいさつを交わした程度やったし…。

■純子さんの遺志を継ぐかたちで創まったんですね。

ちょうど1周忌の少し前、91年の2月ごろかなあ、健さんからかかってきた1本の電話が、今の神戸文化支援基金へとつながる私の18年間を運命づけたことになります。ちょっとご相談したいことが…ということで突然来られてね。「若い芸術家たちを支援するため、純子が残した1千万円を役立てて下さい」と言われるんです。最初、私はね、多額の保険金でも入って、それを有効に使いたいんかなあ…って思って。不躾にも「保険に入っておられたんですか?」と聞いた。すると、そうではない、純子が自分で働いて貯めてたお金なんです、と。5年ほど前からガンを抱えてて、保険にも入れなかったということでした。そうであるならば、これは「余計に」大切にしないとあかんなあ、と思ったわけですね。

才能があるにもかかわらず、発表のチャンスがない若いアーティストたちの表現の場をつくったり、有意義な企画なのに、資金不足に悩むイベントの支援…。絵画や音楽や演劇が大好きな、ごく普通の女性だった純子さんは、身銭を切ってそんな活動をずっとやっておられたようでした。妻の望んでたことを亡くなったあとも実現させてあげたい。そう健さんは思ってて、彼女が貯めていた1千万のお金をどうしたもんか、どこへ寄付しようか…といろいろ考えた末、これは島田しかないということで、訪ねて来られたんです。

30代の頃、母校神戸大学のグリークラブで指揮をする島田さん

神戸理事・事務局長。著書に『NPO起業・経営・ネットワーキング』『日本のNPO史』など多数。

⑦**貿易センタービル**
(株)神戸商工貿易センターが運営する26階建てのオフィスビル。1969年、神戸市中央区浜辺通5丁目に竣工した。

健さんの申し出にどう応えるか、私は自問を続けました。私がええかっこして、支援しますよ…言うて、アーティスト達に配んのは簡単やけどね。彼女が生きてたらきっとやりたかったに違いない、いろんな夢や想い、それを少しでも〝かたち〟にして、持続させていかなければ…という結論に達したんです。ただ単にお金だけではなく、「遺志」「魂」「思い」を受け継ごうと。そうであればやっぱり「亀井純子さん」という名前を残さないといけない。ほんで、基金をつくる賛同者を呼びかけて、純子さんの1周忌、91年の5月26日に準備会をスタートさせたんです。

■でも、設立への道のりはスムーズではなかったとか…。

亀井健さん個人から私個人に1千万贈与するということなら、贈与税などいろんな障壁がある。ちょっとそれは問題あるんでは、ということを他から言われてね。だったら、法人にするしかない。かといって財団法人化は当時3億かかるとかで、これも難しい。公益信託で行くしかない、ということで、兵庫県に相談に行ったんやけれどもね。そしたら3千万くらいの基本的な資産がないとだめです、と言われてしまった。まあこれは法律で決まってるというわけでもないんやけど、運用上、それくらいないと難しい。すぐつぶれてしまうというんです。でも、事情を説明して、全国で前例のないケースであっても、こういう市民が支える文化というのは大事なんやから、ぜひつくりたいと交渉した。そしたらこれは〝消滅型〟です、それでもいいですか、最後は残余財産を没収されますよ、と県の役人から言

筆者おすすめ島田誠さんの本

忙中旅あり　蝙蝠（こうもり）流文化随想
エピック
定価 1,365 円　2000 年 1 月 17 日

島田さんのメルマガより

『高く堅固な壁と、それにぶつかって割れる卵があるなら、私は常に卵の側に立つ。
小説家が壁の側に立った作品を書いたとしたら、いったい何の価値があるのか』。

◇

上記の言葉は 09 年２月１５日、村上春樹さんのエルサレムでの受賞演説からです。私たちは、きわめて歪んだ、うんざりする、あるいは絶望する時代を生きています。でも、嘆き、愚痴り、嘲る、井戸端、居酒屋談義からは何も変わりません。政治も行政も、いわば鏡に映った私たちの姿ですものね。私たちこそ、自立した市民として、意識をもって行動しなければなりません。村上春樹さんは神戸高校の後輩ですが、勇気ある発言でした。
勿論、私も卵の側にいます。ぼくの抱えた卵は、いくつも壁にあたって壊れました。壊れること、それを恐れないことが重要なのです。

◇

「志をもって」ということは、現代ではほとんど「闘う」ということと同義語ではないか…
これは今井康之さん（当時、岩波書店専務）からいただいた手紙にあり、私の著書『蝙蝠、赤信号をわたる』（1997 年、神戸新聞総合出版センター刊）の扉に使わせていただきました。

◇

ぼくがやっているサロン
そして文化を支える小さな基金
ファンドレイジングのための「ぽたんの会」など
すべて、自立を形にし、卵となって壁に向かうための試みです。

◇

あなたも卵を抱えています。一緒に堅い壁に向かいましょう。これを読んで下さっているあなたと一緒に。この世界、この国、この街、この地域。ぽんくら米国のニューズウィークが日本を「ぽんくら」と言っているらしい。悔しいけど、その通りですね。

（島田　誠）

※「ギャラリー島田＆アートサポートセンター神戸メールマガジン」376　号（2009. 3. 7）より

われてね。それでもいいですと言って、92年の夏に立ち上げたんですね。助成はその前の年から始めていたんですが。

まあ、この2つの基金もそうやし、ドネーションパーティーを行うぼたんの会なんかのシステムもそうやけどね。一つひとつ先鞭をつけていったというか、アイディアを出し、そしてそれを自分で実践して成功させてみせる、ということを私はやってきたわけです。こういう1千万円単位で基金や公益信託をつくるというのは、やろうと思ったら誰でもできることなんです、志さえあればね。ファンドレイジングというしくみも今の時代どんどん広がっていってるし。将来いろんなとこで、気軽にそんな財団がたくさん生まれ、またそれらが合併して集合住宅型ファンドとして機能すれば、自立した市民社会のモデルとして大変意義深いものになるでしょう。

■「一般財団法人神戸文化支援基金」。将来ビジョンを教えてください。

そうねえ。最初にお話ししたとおり、近い段階で、公益財団法人にするということがひとつ。それと、今は「アート」と名がつけば何でも申請できるので、助成先が美術に片寄ったり、音楽に片寄ったりしている年もあったわけですね。それをたとえば音楽、美術、舞台芸術…演劇とかダンスとか、さらには文学など、分野ごとに各100万円、年間5～600万円くらいの助成ができるような規模になれば、もっといいなと思いますね。

亀井純子さんが亡くなられて私に思いをパスされて、健さんが理事長をされて、そのあと健さんが亡くなられて、私が理事長をパスされ、そして、私が財団を立ち上げた。継ぐたびごとに、さらに思いを強く持ちながら、未来に向かってパスを続けてきたわけです。だけどいったん公益財団法人になってしまえば、寄付の受け皿としての要件が揃ってくる。そうなると公益信託のときと違って、評議員会とか理事会とかがきっちりと機能するようになる。審査の公正性、透明性などが一層問われることになるけども、以後はそれ自身の人格で動いていくことになります。そんなレールを敷いてしまえば、あとはどのように育っていくかわかりません。でも財団そのものは永続的な存在になって、幅広く神戸の文化を支えていく基盤ができるだろうと思うんです。将来、私がいなくなってもね。

（完）

PROFILE

島田（しまだ） 誠（まこと）

1942年神戸市生まれ。神戸大学経営学部卒業。三菱重工業勤務を経て、神戸元町商店街の「海文堂書店」社長に就任。79年、店内の社長室をリニューアルしたスペースに「海文堂ギャラリー」を創設。00年よりギャラリーを北野へ移し、ハンター坂に「ギャラリー島田」を創設。「アート・サポートセンター神戸」代表。